

塩竈市文化財調査報告書第 3 集

# 杉 の 入 裏 窯 跡



平成 2 年 3 月

塩竈市教育委員会



## 序

今回行われた『杉の入裏窯跡』発掘調査につきましては、地権者および各方面関係機関より全面的なご理解ご賛同を賜り厚く御礼申し上げます。

昭和63年に調査実施した本遺跡は、丘陵上と海浜に立地しております。海浜には製塩遺跡が存在し、丘陵上には須恵器窯跡・住居跡・貝塚が存在しており、本市にとっては極めて特異な遺跡であることが判明いたしました。また、杉の入裏地内は古代塩竈の景観を残す貴重な地域でもあり、多賀城国府とのかかわりあいの中で古代塩竈が形成される時期を考察する上でも重要な遺跡と考えられます。

この報告書によって、本市のもつ歴史の一面が広く理解されることをご期待いたします。当教育委員会といたしましては、今後も文化財保存活動にいっそう努力して参りたいと思いますので、関係各位の深いご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、公務ご多忙の中報告書作成のためご尽力いただいた先生方に深く感謝の意を表し、発刊のことばに替えさせていただきます。

平成2年3月

塩竈市教育委員会

教育長 菅野 聡



## 例 言

- 1 本書は岡崎運輸が施行した駐車場建設に伴う杉の入裏窯跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は塩竈市教育委員会が主体となり、塩竈市杉の入小学校教諭高橋守克が担当し、宮城県教育庁文化財保護課および宮城県多賀城跡調査研究所が終始協力した。
- 3 本書における土色についての記述には「新版標準土色帖」（1973年）を利用した。
- 4 遺構配地図は平版測量に1／100、遺構平面図、断面図は遣り方実測による1／20で作成した。
- 5 本書の第一図は建設省国土地理院発行の1／5万地形図「塩釜」「松島」を複製して利用した。
- 6 本書の作成に至る遺構、遺物の整理は宮城県文化財保護が主として行った。
- 7 本書は調査者間で協議しながら、進藤秋輝、真山悟、高橋守克が執筆編集した。
- 8 発掘調査の記録や整理に関する資料および出土品については塩竈市教育委員会が保管し、求めに応じて公開している。
- 9 本遺跡はこれまで貝塚や製塩遺構を包含する杉の入裏B遺跡として登録されていたが、今回新たに窯跡が発見された。したがって、今回報告書を発刊するにあたってはその内容を的確に示す意味で「杉の入裏窯跡」という表題にした。遺跡名は従来どおりである。
- 10 調査協力者：宮城県文化財保護課  
進藤秋輝、真山悟、阿部恵、斉藤吉弘、鈴木真一郎、菅原弘樹  
宮城県多賀城跡調査研究所  
丹羽茂、後藤秀一、村田晃一  
岡崎運輸代表取締役 岡崎多利夫  
宮城県塩釜警察署宮城県巡查 藤原二郎  
塩竈市文化財保護委員会 丹治英一  
塩竈市職員  
高橋利夫、井城信広、本田幹枝、阿部貞雄、  
茂泉萬、西川信男、伊藤敏昭、鈴木奈津子

# 目 次

I はじめに .....	1
II 発見された遺構と遺物 .....	3
III まとめ .....	14

## 調 査 要 項

遺跡名及び所在地： 塩竈市杉の入裏窯跡  
塩竈市杉の入裏字39番地の81

調査期間： 昭和63年4月22日～4月30日、5月25日、26日

調査主体者： 塩竈市教育委員会

# I はじめに

杉の入裏B遺跡は塩竈市の北東部にあたる塩竈市杉の入浦地内に所在する。この付近の地形をみると塩竈湾の海触作用による4本の半島が塩竈湾に向かって北東に延びている。これらのうち、最も東に位置するのが杉の入表半島であり、その西に位置するのが杉の入裏半島である。

杉の入裏半島の基部付近は北からの海触作用により2つ入江を形成している。このうち東の入江基部にあたる北斜面には奈良・平安時代のアサリ、カキを主体とした貝塚があり、本窯跡はその南斜面にあたる。

ところで、昭和63年1月22日に一市民から同貝塚を包含する地域で有限会社岡崎運輸の駐車場建設に伴う造成工事が行われている旨の連絡が塩竈市教育委員会にあった。同教育委員会は直ちに現地へ赴き、現状を確認したところ北斜面にある同貝塚はほとんど破壊されていたものの、これらに関連する遺構が南斜面に広がる様相がうかがわれたため、遺構の存否を確認する調査が必要となった。塩竈市教育委員会と県文化財保護課とともに、工事者に対し確認調査についての協力を求め、快諾いただいた。

4月23日から4月30日まで、塩竈市教育委員会が主体となり、宮城県文化財保護課、多賀城跡調査研究所が協力して調査を実施した。その結果、奈良時代から平安時代の竪穴住居3棟と奈良時代の須恵器窯3基を発見した。特に塩竈市内での須恵器窯の発見は初めてのことであり、しかも塩竈市は工場、宅地建設にともなう造成工事が盛んで遺跡のほとんどが破壊をうけた地域であることから、調査の成果を踏まえて保存協議を行った。4月28日には緊急の塩竈市文化財保護委員会が開催され、同委員会は市長に対して保存、活用すべき旨を答申した。これを受けて、教育委員会並びに市当局は保存する方向で検討し、地権者と協議を重ねてきたが、代替用地の獲得等が困難であることから保存は不可能となり、遺構模型の製作、遺物の整理保存の方針と決定した。

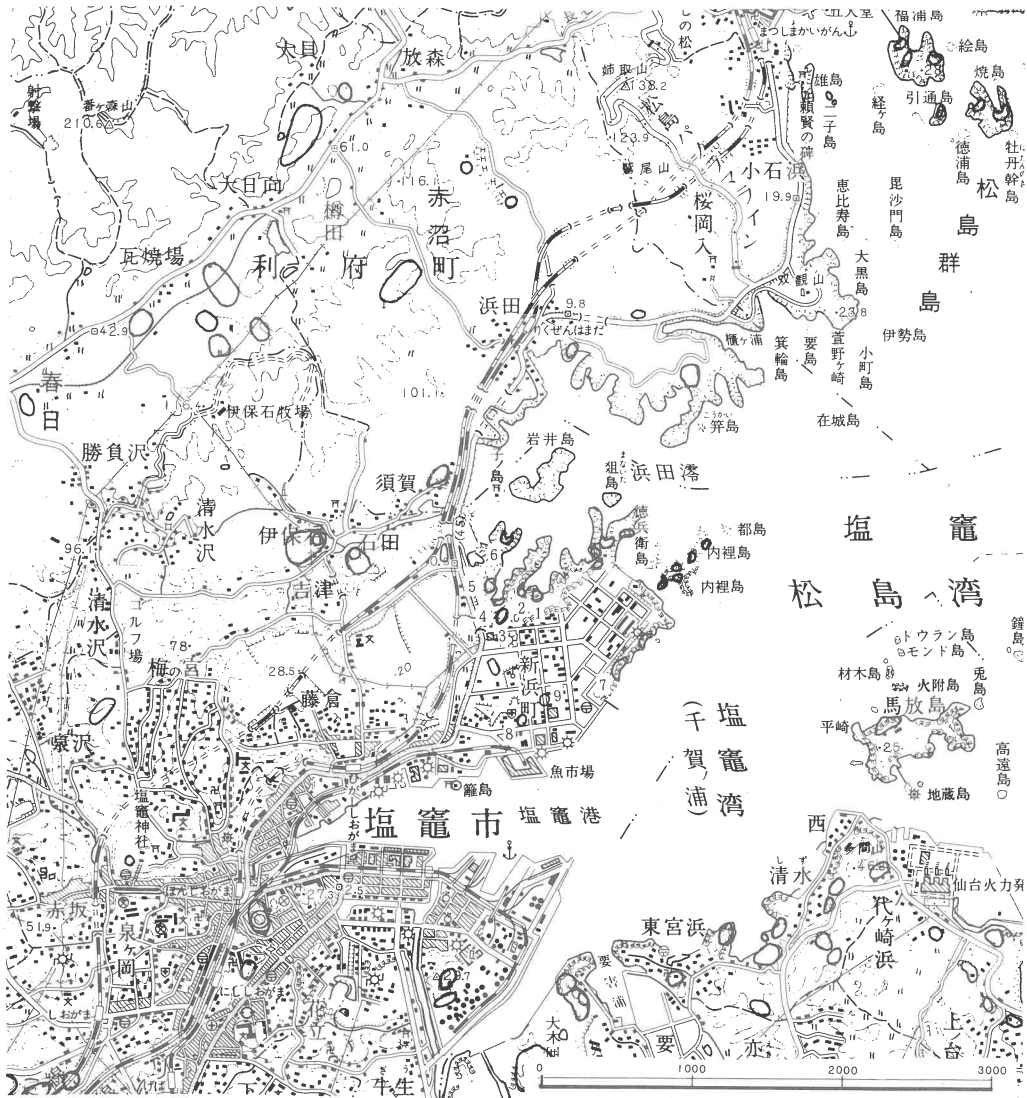
5月25・26日に補足調査を実施し、工事に着手することになった。

塩竈市内の地質は硬質の凝灰岩を基盤としてその上に塩釜集塊岩層や砂質土が推積することから、窯跡の存在は予想できなかった。しかし、凝灰岩を基盤とする谷合いでは、その上部に粘土層の推積が見られ、窯跡群はこの分布の狭い粘土層に構築されている。生産可能な地域は最大限利用するという点は、この地域での須恵器生産のあり方の特色とみられる。

本遺跡の周辺には奈良・平安時代の貝塚や製塩遺跡が集中する。本遺跡の西の入江を中心として越の浦A、B貝塚、杉の入裏A貝塚、裏杉の入遺跡があり、本遺跡の東の小さな入江には杉の入裏C貝塚がある。東の杉の入表半島では南向の海浜に、この種の遺跡が集中する。縄文晩期から弥生時代を経て奈良時代の製塩遺跡である新浜B遺跡、江戸時代のカキ灰生産跡であ

る新浜A遺跡、弥生時代の洞窟遺跡である崎山囲洞窟遺跡、平安時代の土師器の標式遺跡である表杉の入貝塚の他、半島東の内裡島には5地点で奈良・平安時代の製塩遺跡や貝塚が形成されている。

このように、本遺跡をとりまく地域は奈良・平安時代における貝塚や製塩遺跡が集中する土地であり、塩釜神社の起源を解明するためにも重要な位置を占めていたことがわかる。



- |           |            |            |            |                         |
|-----------|------------|------------|------------|-------------------------|
| 1. 杉の入裏窯跡 | 2. 杉の入裏B貝塚 | 3. 裏杉の入遺跡  | 4. 杉の入裏A遺跡 | 国土地理院 S55年松島1/5万 塩釜1/5万 |
| 5. 越の裏B遺跡 | 6. 越の裏A遺跡  | 7. 新浜A・B遺跡 | 8. 崎山囲洞窟   |                         |
| 9. 表杉の入貝塚 |            |            |            |                         |
|           |            |            |            |                         |
|           |            |            |            |                         |

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡





第2図 発掘調査区

## Ⅱ 発見された遺構と遺物

### 第1号窯跡(第4図)

発掘区の中央南寄りに位置する地下式窖窯である。煙道および燃焼室～前庭部は削平のため失われている。

〔焼成室〕 平面形は両側壁が平行し、先端部でやや細くなり、丸くおさまる。壁は下位がほぼ垂直に立ち上がるが、上位は崩落のため不明である。表面は青色に還元し、硬化している。床はほぼ平坦で、約10°の傾斜をもつ。壁同様に還元・硬化している。

(軸線の方向) N-63°-Wである。

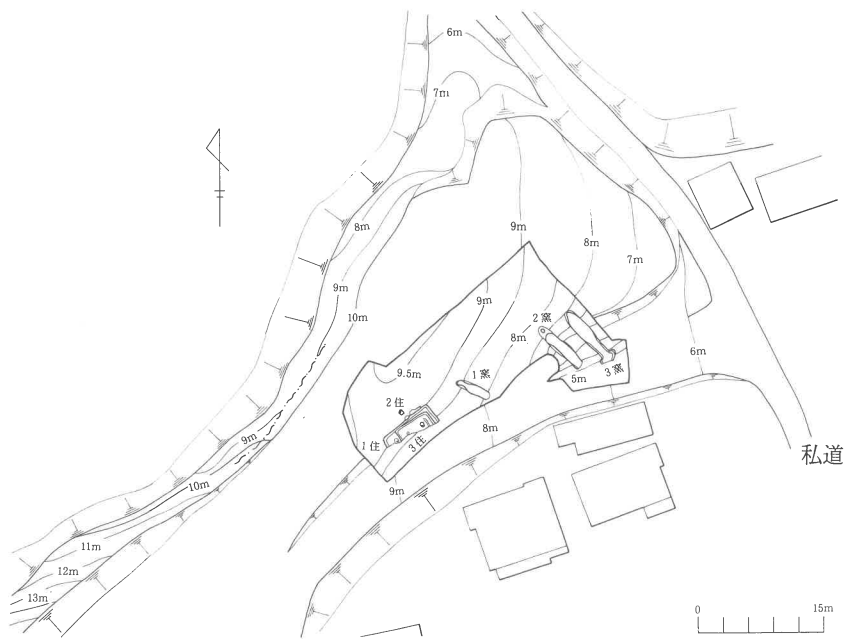
〔規模〕 焼成室-残存長4.3m、幅約1.0m、残存高約0.4m、確認面からの深さ約1.0m

〔出土遺物〕 堆積土中から須恵器・土師器片が出土しているが、図示できるものはない。

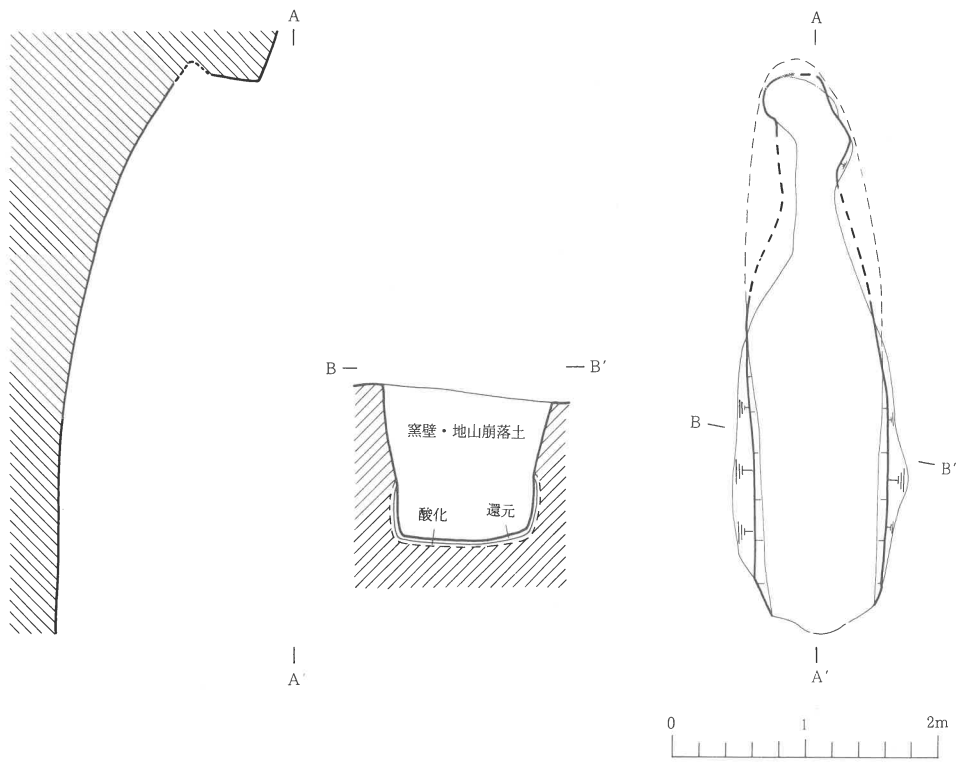
### 第2号窯跡(第5図)

発掘区の東南寄りに位置する地下式窖窯である。焚口部～前庭部は削平のため失われている。

〔煙道〕 窯の先端やや手前に位置し、平面形は円形を基調とする。



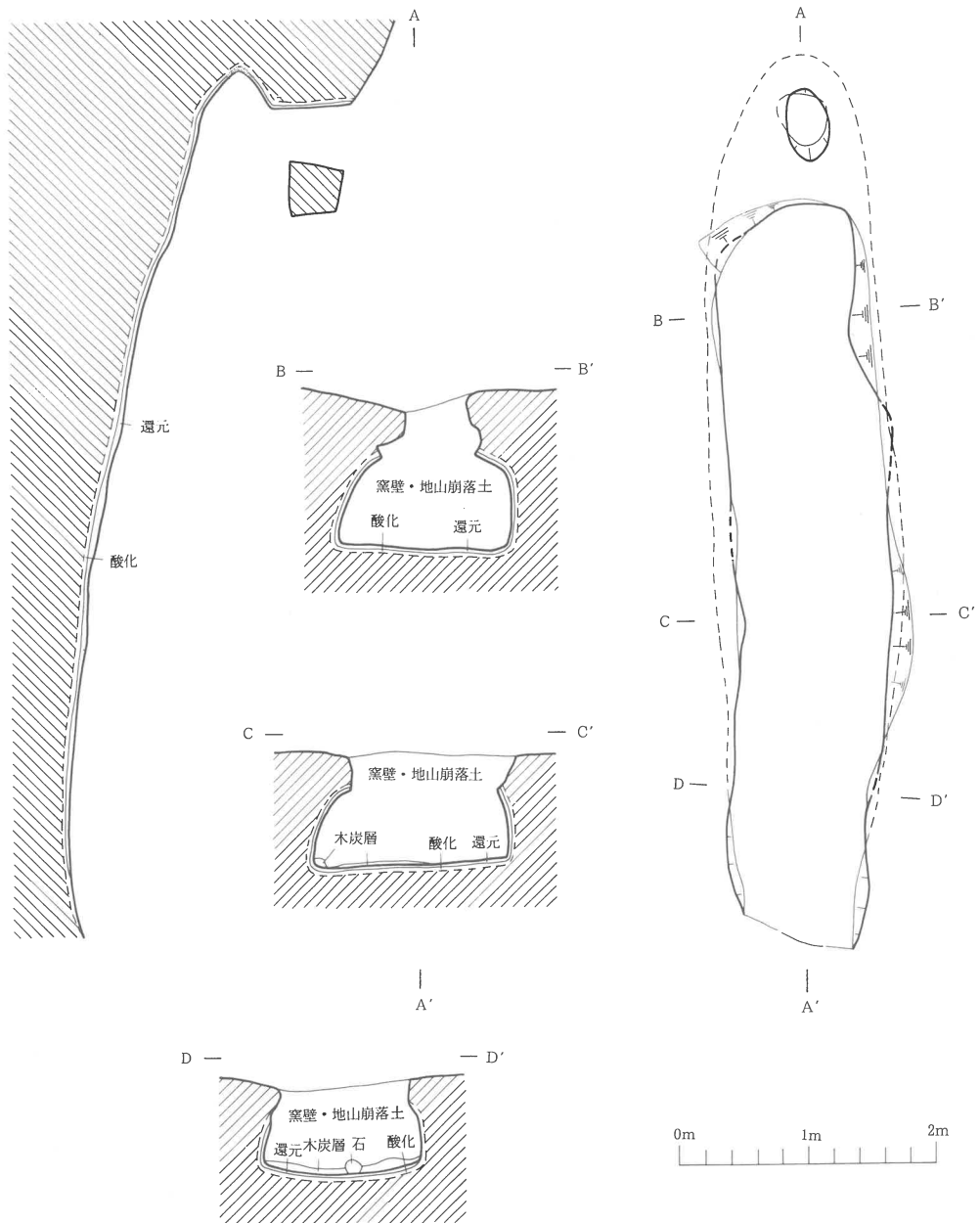
第3図 遺構配図



第4図 1号窯跡

〔焼成室〕 平面形は両側壁が平行し、先端部でやや細くなり、丸くおさまる。燃焼室との境は明瞭でない。壁は内弯して立ち上がり、断面形は半円形になる。床はほぼ平坦で、約20°の傾斜をもつ。壁・床とも表面は青く還元し、硬化している。

〔燃焼室〕 平面形は両側壁が焼成室へ向けてやや開く不整形である壁は内弯して立ち上がり、断面形は半円形を呈する。表面は一部左側壁が青く還元している。床は中心部が浅く凹入り、



第5図 2号窯跡

であり、青く還元している。また上面には木炭層が堆積している。

(中心軸の方向) N-48° -Wである。

〔規模〕 全 体—残存長6.8m 確認面からの深さ1.2m

焼成室—長さ 4.6m 幅1.5m 残存高0.6m

燃焼室—残存長2.2m 幅1.3m 残存高0.5m

〔出土遺物〕 床面からの須恵器、堆積土中から須恵器・土師器が出土している。

須恵器(第6図1~6) 坏・高台付坏・蓋・甕・播鉢がある。

坏(1・2) 1は器中位に稜をもち、稜から口縁部にかけて直線的に外傾する。底部は手持ちヘラケズリされている。2は底部から口縁部にかけて直線的に外傾する。2は底部から口縁部にかけて直線的に外傾する。底部にはヘラ切り痕が残る。

高台付坏(3・4) 3は底部から口縁部にかけて直線的に外傾するもので、底部周縁に厚く短い高台が付く。4は底部・高台部の破片である。高台は底部周縁やや内側に付き、長く外側にふんばる。底部は回転ヘラケズリされている。

蓋(1) 壺蓋である。天井部が平坦で、口縁部は急角度で折れ曲がり垂下する。つまみは欠損している。

甕(1) 口頸部が長く大きく外反し、端部に縁帯をつくり出している。口頸外面上半に平行沈線と櫛描き波状文が交互に3段巡らされている。

播鉢(1) 体部下端~底部の破片である。底部は円盤状を呈し、体部は底部周縁の内側から外傾して立ち上がる。体部外面に櫛描き波状文が巡らされ、底部側面が底面にかけてヘラケズリが施される。

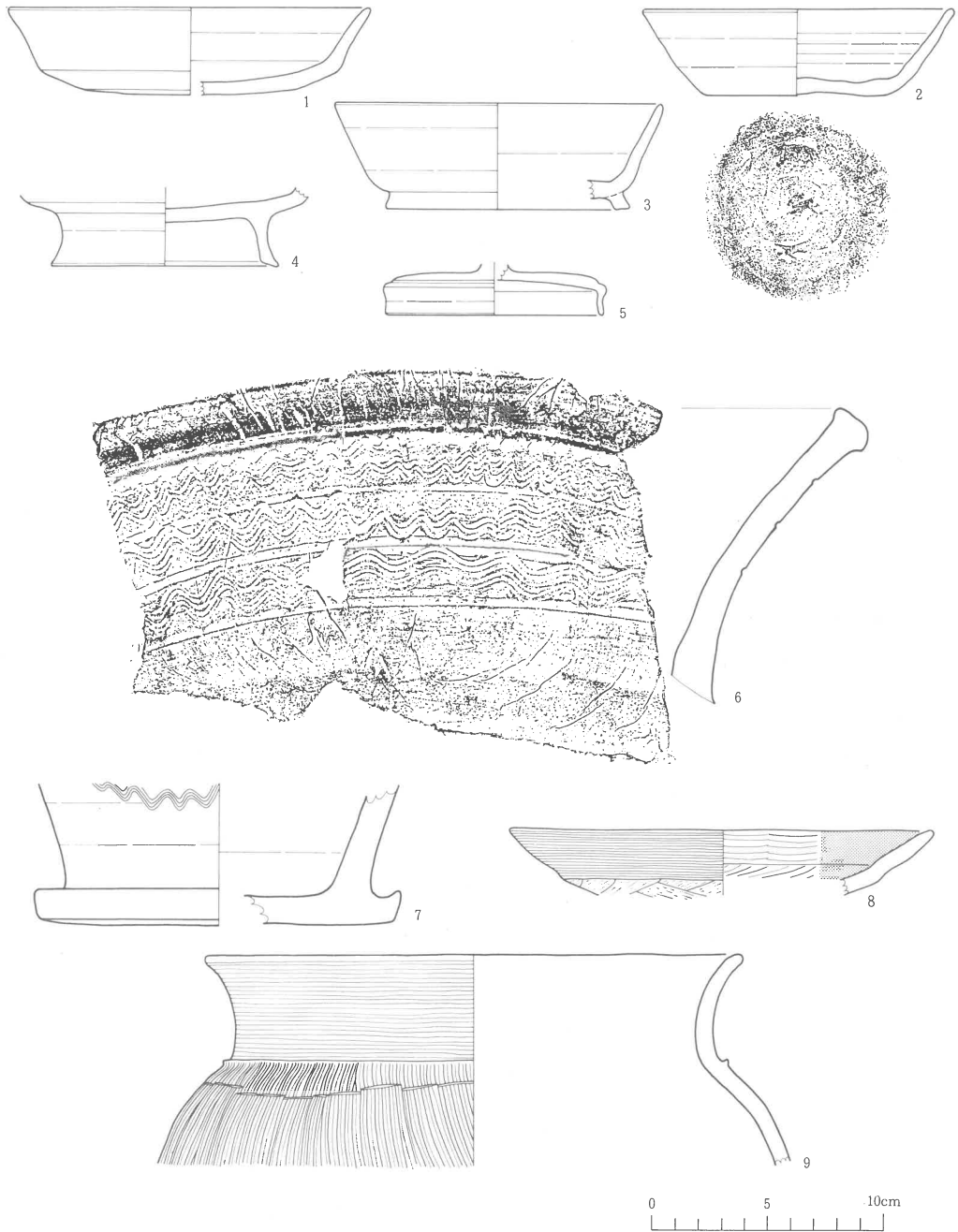
土師器(第6図8・9第7図) 坏・甕がある。

坏(第6図8・第7図2・3) 8は 底部が欠損する。器中位にかるい段をもち、段から上は強く外傾する。外面の段から上は横ナデ、下はヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。

2・3はロクロ使用のものである。底部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾しており、底部には回転糸切り痕を残す。再調整はない。内面はヘラミガキ・黒色処理されている。

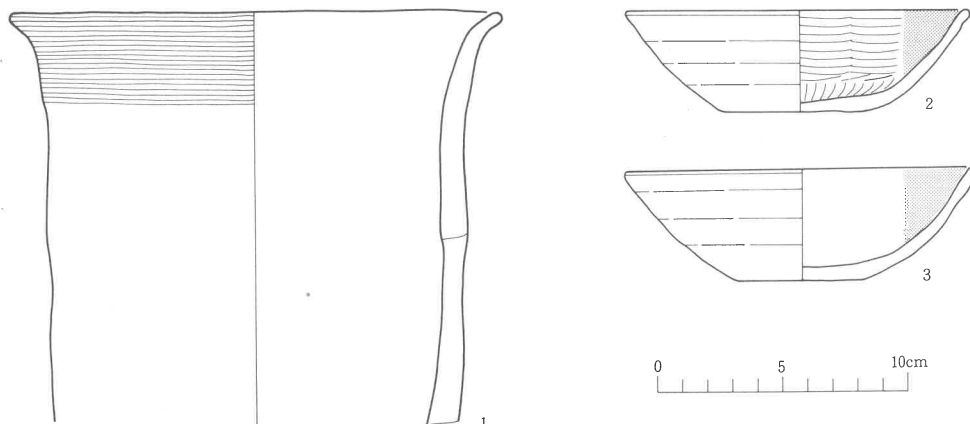
甕(第 図9・第 図1) 9は体部が球形を呈するもので、頸部には段が巡り、口縁部は外反する。体部外面は刷毛目、口縁部外面は横ナデの調整が施され、内面は一部にナデ調整がみられる。

1は長胴形の甕である。体部上半はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口縁部外面に横ナデ調整がみられるが、他の部分は磨滅のため不明である。



No.	層位	種類	器種	備考	5	埋土	須恵器	蓋	壺用蓋
1	床	須恵器	坏	底部-手持ちヘラズリ	6	埋土	須恵器	甕	外面-櫛描き波状文 平行沈線
2	埋土	須恵器	坏	底部-ヘラ切り	7	埋土	須恵器	插鉢	外面-櫛描き波状文
3	埋土	須恵器	高台付坏		8	埋土	土師器	坏	外面-横ナデ、ヘラズリ 内面-ヘラミガキ、黒色
4	埋土	須恵器	高台付坏	底部-回転ヘラズリ	9	埋土	土師器	甕	外面-横ナデ、刷毛目

第6図 2号窯跡出土遺物1)



No.	層位	種類	器種	備考	2	埋土	土師器	坏	内面—ヘラミギ、黒色 底部—回転糸切り
1	埋土	土師器	甕	口縁外面—横ナデ	3	埋土	土師器	坏	内面—ヘラミギ、黒色 底部—回転糸切り

第7図 2号窯跡出土遺物2)

### 第3号窯跡（第8図）

発掘区の東南端にあり、2号窯と隣接・平行する地下式窖窯である。崩落や削平により、煙道および前庭の一部が失われている。

〔焼成室〕 平面形は第1・2号窯と大きく異ならないが、中央にやや膨らみをもつ胴張形になる。燃焼室との境は明瞭でない。壁は内弯して立ち上がり、断面形は半円形になるものと推定される。表面は青く還元され、硬化している。床は大部分が平坦な単一面であるが、一部燃焼室寄りの部分で2面確認された。古い面は燃焼室との境に深さ20cmほどの舟底状のピットがみられ、それに対し新しい面はそれを埋めて形成されている。その部分も古い面ほど顕著ではないが、やや凹んだ状態になっている。傾斜角は両面とも約15°であり、古い面は舟底状ピットを除く部分、新しい面は全面が還元・硬化している。

〔燃焼室〕 平面形は両側壁がほぼ平行する長方形である。壁はわずかに内傾するが上部が欠損しており、断面形は不明である。床は焼成室寄りの部分で2面ある。焼成室から続くもので古い面は舟底状のピットになっており、新しい面はそれを埋めた層の上面である。表面は前者が浅く凹むのに対し、後者はほぼ平坦である。また後者の焼成室寄りの部分が還元・硬化している。

〔焚口部〕 特に施設はない。

〔前庭部〕 焚口部から両側に若干張り出した。不整の土壌状の平坦面である。壁の立ち上がりは急角度で、壁沿に周溝が巡る。（中軸線の方）N-45°-Wである。

〔規模〕 全体—残存長7.9m 確認面からの深さ1.5m

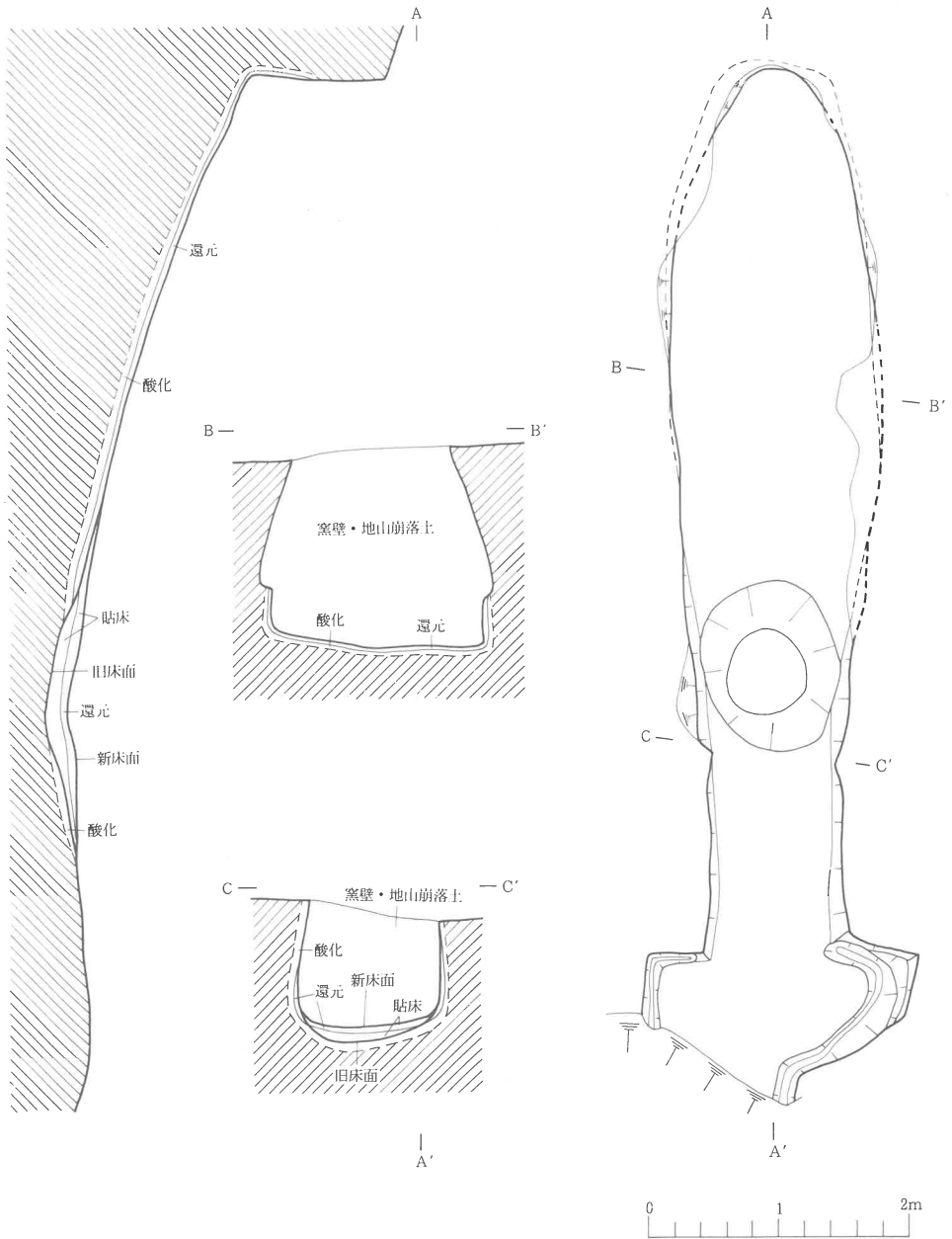
焼成室—長さ 5.0m 幅1.6m 残存高 0.4m

燃焼室—長さ 1.7m 幅0.9m 残存高 1.1m(旧)・0.9m(新)

焚口部— 幅0.9m 残存高 0.5m

前庭部—残存長1.2m 幅2.1m 残存高 0.4m

〔出土遺物〕 堆積土中から須恵器が出土している。



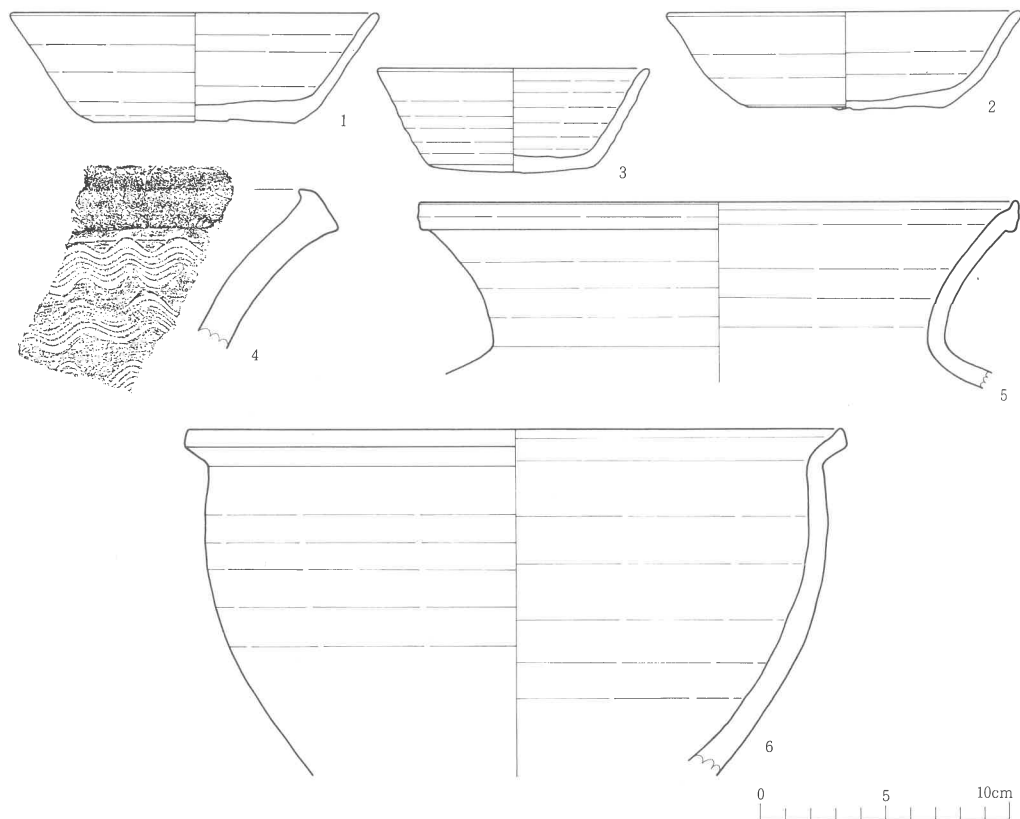
第8図 3号窯跡

須恵器（第9図1～6）坏・甕・鉢がある。

坏（1～3）いずれも口縁部は直線的に外傾しており、底部はへら切り痕を残す。このうち3は他に比して小形かつ深めのもので、底部形態も若干丸底風をなすのが異なる。

甕（4・5）ともに口頸部が長く大きく外反し、端部に縁帯をつくり出している。このうち1は大形で、口頸部外面に櫛描き波状文が巡らされている。

鉢①体部は丸みをもって立ち上がり、頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部は短く外傾する。口縁部は縁帯状になる。



No.	層位	種類	器種	備考	4	埋土	須恵器	甕	口縁外面 —櫛描き波状文
1	埋土	須恵器	甕	底部—へら切り	5	埋土	須恵器	甕	
2	埋土	須恵器	甕	底部—へら切り	6	埋土	須恵器	甕	
3	埋土	須恵器	甕	底部—へら切り					

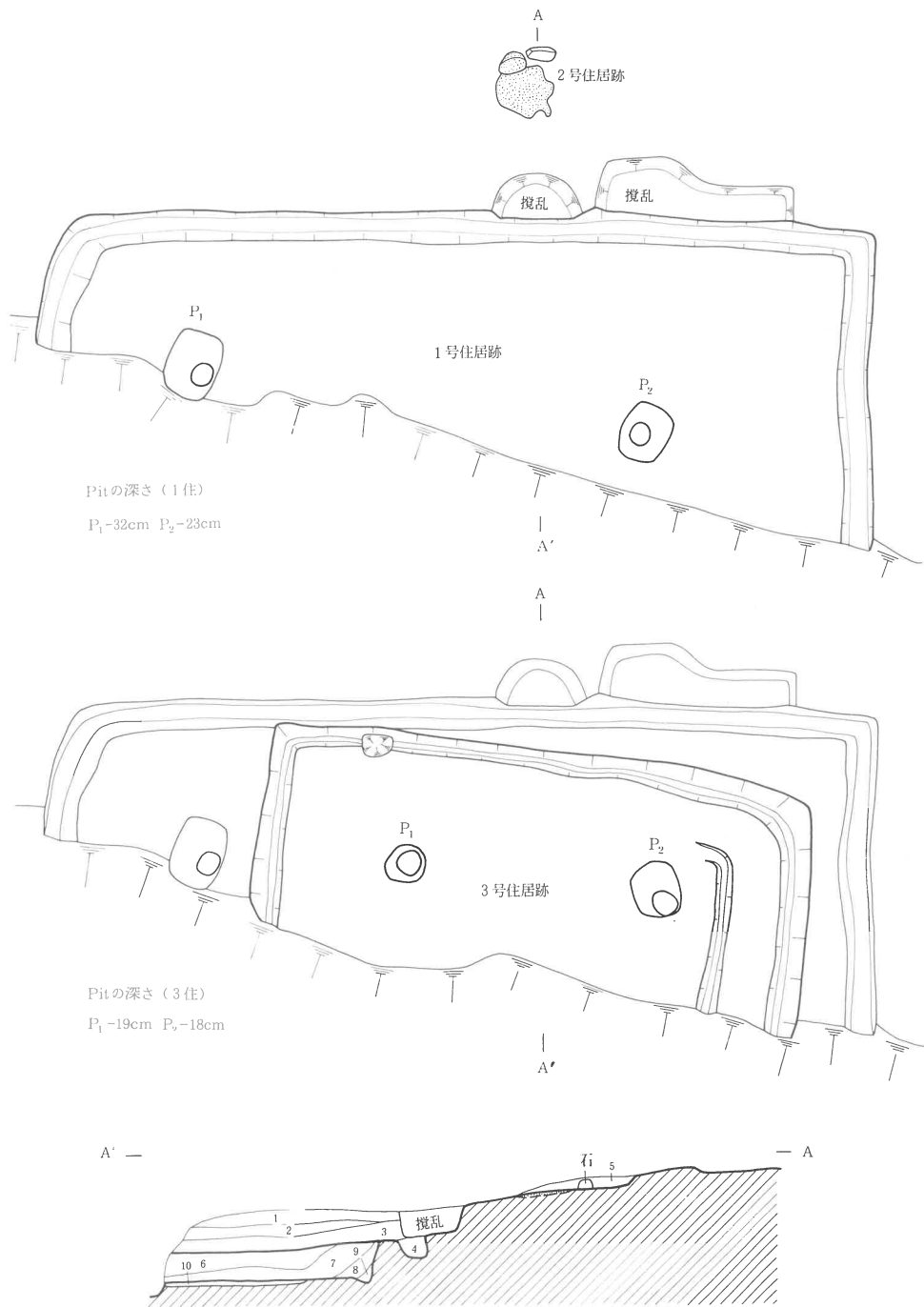
第9図 3号窯跡出土遺物

### 第1号住居跡（第10図）

〔位置・重複〕 発掘区の西寄りに位置する。2・3号住居跡と重複しており、3号住居跡を切るが、2号住居跡との関係は不明である。

〔平面形・規模〕 南半は削平されているが、方形を基調とするものである。規模は北辺で6.3





1	褐色シルト	灰白色火山灰粒・地山ブロックを含む	1住土層
2	暗褐色シルト	焼土・木炭を含む	
3	灰褐色砂質シルト	地山ブロックを含む、周溝内堆積土	2住土層
4	黄褐色シルト		
5	暗褐色シルト	地山ブロックを含む	3住土層
6	褐色砂質シルト	木炭・地山ブロックを含む	
7	黄褐色砂質シルト	木炭・地山ブロックを含む	
8	褐色シルト	周溝内堆積土	
9	褐色シルト	地山粒を含む、貼床で固くしまっている	
10	褐色シルト		

第10図 1～3号住居跡

m、残存部が長い東辺で2.5mである。

〔堆積土〕 褐色ないし暗褐色土で3枚に分かれる。最上層には灰褐色火山灰が混入する。

〔壁〕 立ち上がりは垂直に近く、壁高は残存状況の良い西壁で40cmである。

〔床面〕 地山および3号住居跡堆積土を床としている。ほぼ平坦であるが、3号住居跡堆積土部分は若干凹んでいる。

〔柱穴〕 2個のピットが検出されている。ともに住居跡の対角線上に位置するとみられ、柱穴と考えられる。

〔周溝〕 壁沿いに巡る。断面形は逆台形で、幅20~30cm、深さ約10cmである。

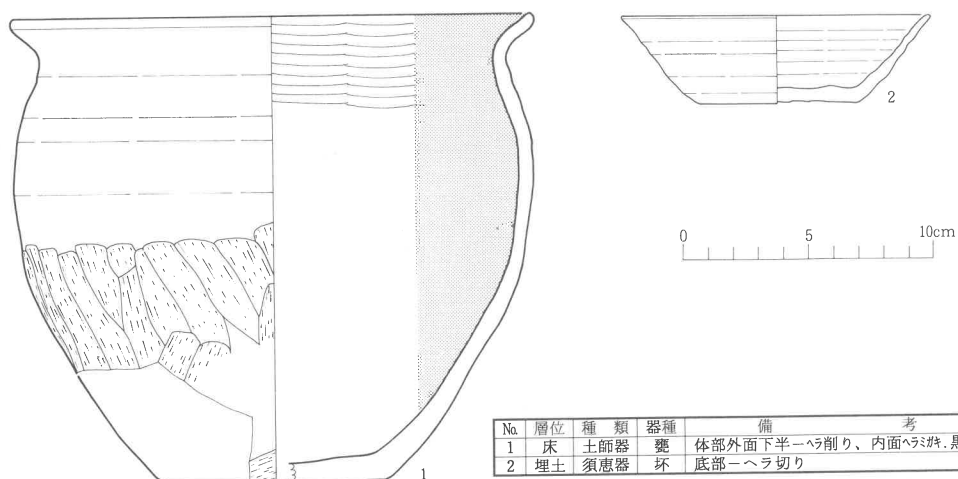
〔出土遺物〕 床面から土師器甕が、堆積土から須恵器坏が出土している。

#### 土師器甕（第11図1）

鉢形の甕である。ロクロ使用のもので、体部上位に膨らみをもち、頸部で括れ、口縁部が短く外傾する。外面上半はロクロ調整、下半はヘラケズリされ、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。

#### 須恵器坏（第11図2）

底部~口縁部が直線的に外傾するもので、底部にヘラ切り痕を残す。窯跡出土のものに比して小形で、底部が小さい。



第11図 1号住居跡出土遺物

#### 第2号住居跡（第10図）

〔位置・重複〕 1号住居跡のやや北に位置し、それと重複するが、削平のため、切り合い関係は確認できない。

〔平面形・規模〕 削平のため平面形・規模は不明である。

〔堆積土〕 焼土・木炭を含む暗褐色土で、北壁際にわずかに残存する。

〔壁〕 北壁が残存する、立ち上がりは急角度で、壁高は約10cmである。

〔床〕 北壁際に残存するのみである。地山を壁としている。

第3号住居跡（第10図）

〔位置・重複〕 第1・2号住居跡と重複しており、1号住居跡に切られている。2号住居跡との関係は不明である。

〔平面形・規模〕 南半は削平されているが、方形を基調とする。規模は北辺で4.2m、残存部が長い東辺で1.9mである。

〔堆積土〕 褐色ないし黄褐色土で、3枚に分かれる。各層に地山ブロックが混入している。

〔壁〕 立ち上がりは垂直に近く、壁高は残存状況の良い北壁で約30cmである。ただし、その上部にある1号住居跡の堆積土の厚さや壁高から判断して、本来の高さは60cm以上あったものとみられる。

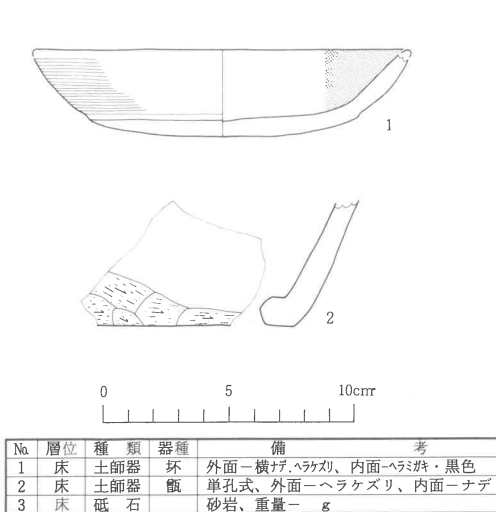
〔床面〕 周辺部は地山、中央部は掘り方埋土を床としている。ほぼ平坦である。

〔柱穴〕 2個のピットが検出されている。ともに住居跡の対角線上に位置するとみられることから、柱穴と考えられる。

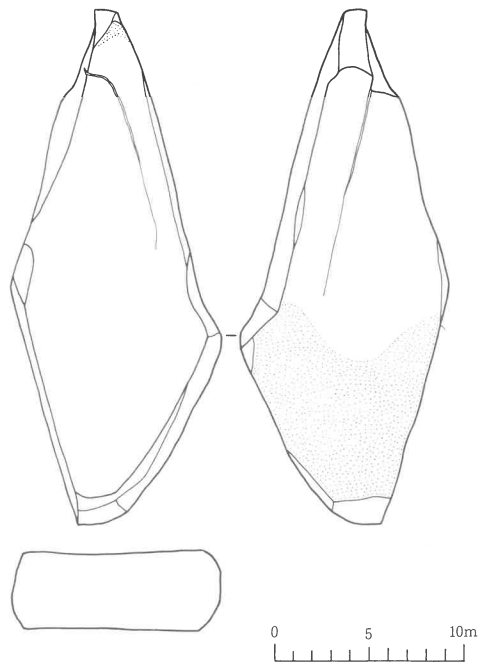
〔周溝〕 壁沿いに巡る。幅約15cm、深さ約3～4cmで、かなり浅い。

〔出土遺物〕 床面から土師器杯・甑 砥石が出土している。

土師器杯（第12図1）



第12図 3号住居跡出土遺物(1)



—13— 第13図 3号住居跡出土遺物(2)

丸底の坏である。底部から口縁部にかけて丸みをもって立ち上がるもので、器中位にかかるい段が巡る。磨滅が激しく器面調整は明確でないが、外面の段から下はヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

土師器甕（第12図2）

底部の破片である。平底単孔のもので、外面はヘラケズリ、内面はナデ調整されている。

砥石（第13図）

厚さ約4cmの板状の砂岩を利用して簡単に整形したもので、平面は菱形を呈する。表裏2面を使用している。

### Ⅲ ま と め

本遺跡は松島湾に張り出した杉の入裏半島の丘陵南斜面に立地している。今回発見された遺構は地下式竈3基と竪穴住居跡3軒である。これらの年代を出土した土器から検討すると次のようになる。

竈跡については出土須恵器に坏・甕・蓋・播鉢がある。このうち特徴の明瞭な坏では、底部がヘラ切り無調整のもの(1)と手持ちヘラ削りされるもの(2)とがある。器形は1では底部～口縁部が直線的に外傾するが、2では器中位に弱い稜をもつ。1は涌谷町長根竈跡（岡田茂弘他：1972）、2は利府町硯沢竈跡（藤沢邦彦他：1987）に類例があり、それぞれ8世紀中葉・8世紀後半に位置付けられている。

これらの本竈での出土状況は、2号竈で1と2の両タイプがあり、3号竈では1タイプのみである。大部分は床面ではなく竈内堆積土出土のもので、必ずしも良好な年代決定資料ではないが、より新しい須恵器の伴出はみられないことから2つの竈の年代の下限を奈良時代すなわち8世紀後半に比定することが可能である。その他1号竈の年代は推定しうる出土資料がなく不明であるが、その形態からみて2・3号竈と大きく異なるものであろう。なお、2号竈堆積土から土師器が出土している。大部分は上記の須恵器の年代に近いものと思われるもののほか、第71図2・3のように平安時代のもも混入している。

住居跡は切り合い関係から3号住居跡が1号住居跡より古いことが明らかである。出土遺物によると、3号住居跡は床面から8世紀前半～中ごろのものと思われる有段丸底の土師器坏が出土している。この1点のみで厳密な年代の対比はできないが、竈跡との位置関係から竈跡関連の建物であった可能性も考えられよう。この他1号住居跡は床面から平安時代の土師器甕が出土しており、明らかに竈跡とは年代の異なるものである。また2号住居跡につい

ては出土遺物がなく、年代は不明である。

本窯跡については8世紀後半を下限とすることが明らかとなったが、その立地状況はこれまで知られた窯跡と若干異なっている。すなわち窯跡が検出されたのは凝灰岩層を基盤とした薄い砂質層が大部分を占める地質環境のなかにあつて谷に面したなかでも粘度層が堆積する限られた部分である。このような必ずしも良好でない地質条件下での小規模な窯業生産のあり方は、前途の硯沢窯跡や、色麻町日の出山窯跡群（岡田茂弘：1970）のような広い範囲内にいくつかのまとまった群をなす形態とは趣を異にしており、本遺跡の一つの特徴といえよう。

#### 引用参考文献

氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第8輯

氏家和典（1967）：「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって—奈良・平安期土師器の諸問題—」  
『柏倉亮吉教授還暦起算記念論文集』

岡田茂弘他（1970）：「日の出山窯跡群」『宮城県文化財調査報告書』第22集

岡田茂弘他（1972）：「長根窯跡群」Ⅱ

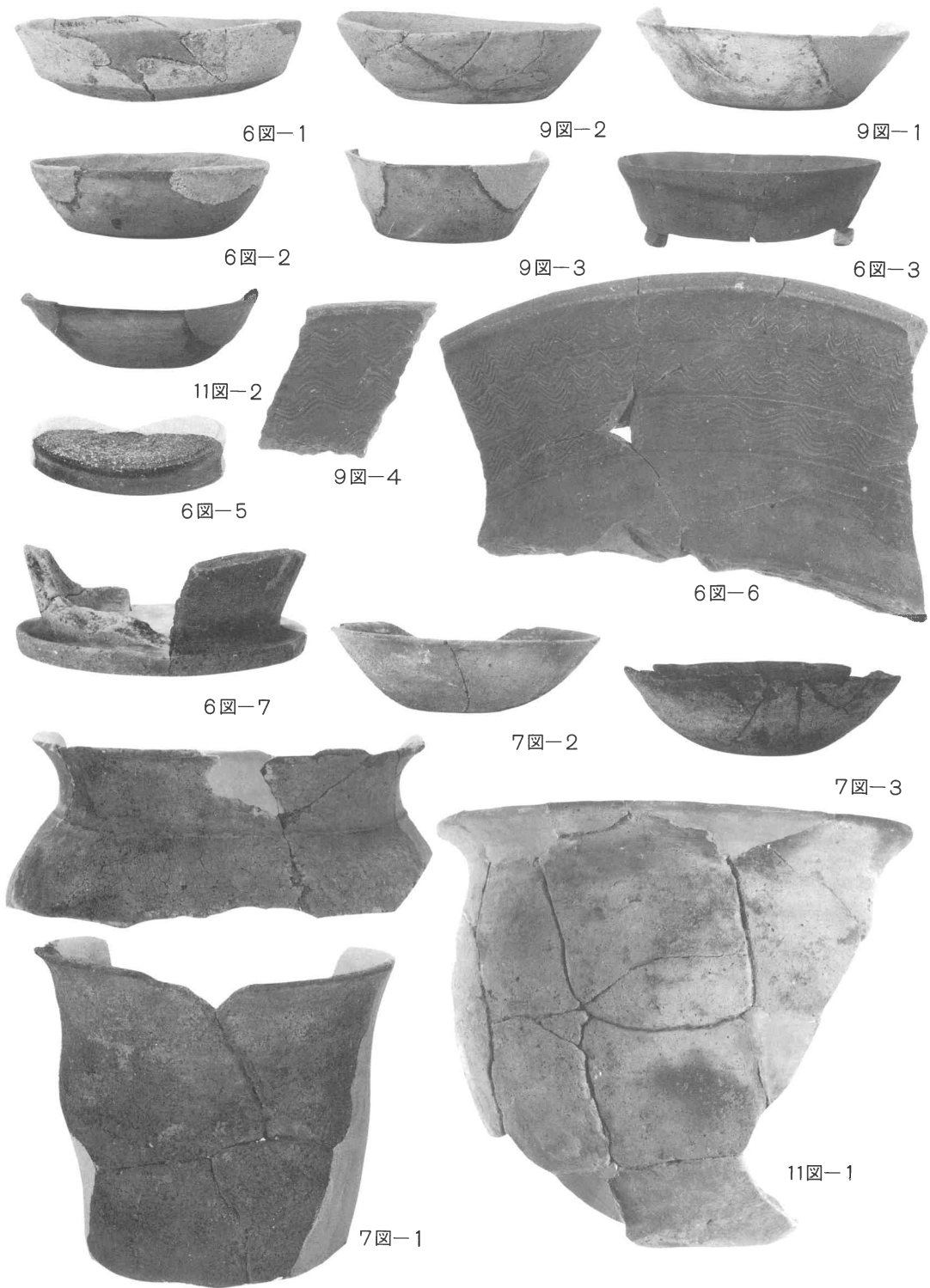
藤沼邦彦他（1987）：「硯沢・大沢窯跡ほか」『宮城県文化財調査報告書』第116集











図版3 出土遺物

